

学生の携帯メール送信・web閲覧と 社会的スキルとの関係

— メディア利用への評価意識とのかかわりの分析 —

竹内 伸宜

問題と目的

今日、携帯電話の利用台数は既に加入電話の利用台数を超えて、我々の日常のコミュニケーション手段として定着したといえる（電通総研, 2007）。携帯電話という情報通信メディアは、これまでの一般加入電話と異なり、個人が携帯することができるというその特性が、家族や所属集団、活動の場という制約を越えて、個体と個体が常時、即座に、直接つながる環境を可能にしたといえる。また、文字媒体通信としての電子メールに代表されるように、音声通信に限定されないコミュニケーションの様式が、ポケットベルという過渡的な形態を経て携帯電話へと統合され、文字の修飾や画像媒体の高品位化とあいまって、多様でかつ新しいコミュニケーションのあり方を人間関係に持ち込む可能性をはらんでいるといえる。

しかしながら、正高信男（2003）が指摘するように、国内における携帯電話利用者の利用形態に目を向けるならば、その現実的な利用の様式は、非常に特殊化されたコミュニケーション関係の維持に限定され、その機能を十全に生かした展開を見せているとはいいがたい。

本来、人間関係の新たなあり方や、従来からの人間関係をより円滑に展開させ発展的な関係を築くことへの可能性を秘めたメディアが、現実には特定の人間関係の維持のみに利用され、場合によっては他の生活活動への阻害要

困にもなるほどに、その利用への依存を示す場合も少なからずあることが指摘されるようになってきている。

竹内伸宜（2004）は、社会的スキルという、社会性を維持するスキルの低さが、携帯電話利用への依存ともいえる状態を招来するのではないかという考えについて確認するため、利用頻度と社会的スキルとの関連についての調査を行った。それによれば、社会的スキルの高低が、そのまま携帯利用頻度の高低につながるわけではなく、社会的スキルが高い群においても、低い群に比較して相対的に携帯メール利用を積極的に評価する傾向があることが示されている。

今回の研究では、メールやwebで利用される文字や画像のように、音声通信に比較して格段に利用頻度の高くなった視覚的な通信媒体の領域に限定するとともに、携帯電話を人間関係維持のための媒体として有意義なものとして評価しながらも、そのような限定されたモダリティーの通信媒体に「のめり込む」ことによって他の活動が阻害され、結果的に依存傾向に陥る過程が社会的スキルのどのような側面と関連しているのかについて、調査することを目的とした。

そのため、社会的スキルと具体的な送信頻度とをつなぐ媒介項として、「人間関係維持という観点からの有意義感」および「携帯メール利用によって本人の他の活動が阻害されているという感覚」という携帯メール利用をめぐる評価意識をとりあげ、それらの変数間の関連を探るなかで、携帯「依存感」とのつながりを探ることにした。

なお、社会的スキルについては、前回（竹内, 2004）考察しなかった下位カテゴリー（「初歩的なスキル」「高度なスキル」「感情処理のスキル」「攻撃処理のスキル」「ストレス処理スキル」「計画のスキル」）を独立変数として処理し、スキルの諸側面がどのようにメディア利用に反映しているのかについて明らかにすることにした。

また、上述のように文字による双方向のコミュニケーション媒体である携帯メールと、文字および画像による一方的な受容行為であるweb閲覧という、ともに視覚的媒体という領域に限定されながらも、対人コミュニケーションの双方向性の有無という点で異なる通信媒体利用の様式への評価意識の違いを比較することで（竹内, 1999）、携帯メールという通信媒体を利用した活動の特殊性を明らかにすることにした。

さらに、上記の目的に供するため、メールやweb利用に関する評価意識を媒介諸項目として設定し、以下のような因果モデルを想定して、変数相互の関連について分析をすすめることにした。社会的スキルはメール送信（あるいはweb閲覧）という行為の意義の確認を介して利用へとつながり、その行為のなかで、他の活動をも阻害するようになったときに、自ら依存しているという感覚がもたらされるという流れから、因果モデルは以下のような変数間の関係として設定されている。

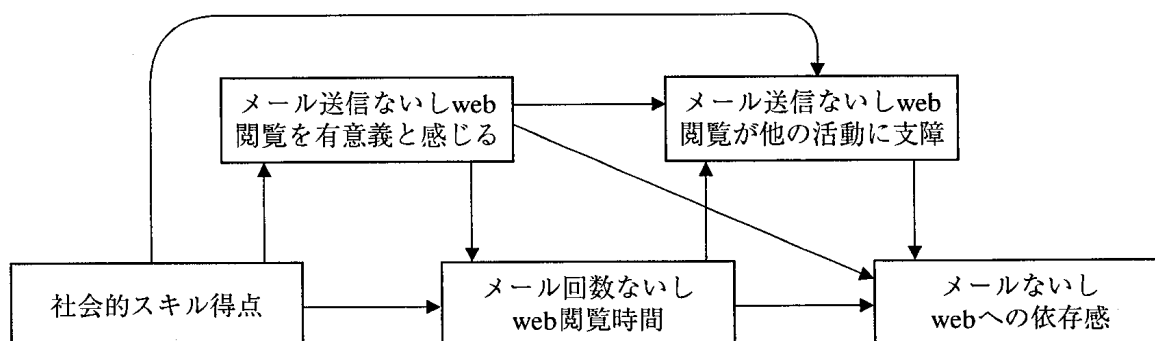


図1 社会的スキルとメール送信ないしweb閲覧の量
およびそれに関わる評価意識の因果モデル

方法

調査対象：文学部で心理学関連の講義を受講する学生（2・3年次の女性）80名
調査は集団で実施した。

質問紙：

- a. メール・web閲覧にかかわる項目

携帯電話（PHSを含む）でのメール利用に関しては、一日平均のメール送信回数を回答させ、「携帯メール送信によって他のやるべき活動に支障が生じていると思う程度」、「携帯メール送信が『他者との関係維持』など自分の生活にとって有意義なことであると思う程度」、「自分が『携帯メール依存者』であると思う程度」について「かなりそう思う」から「まったくそう思わない」までの5段階評定を行った。

一方、インターネット（携帯電話などの端末での利用も含む）でのweb利用（ホームページ閲覧）の実態については、一日平均のweb（ホームページ）閲覧時間を回答させるとともに、「web閲覧に時間を費やすことで他のやるべき活動に支障が生じていると思う程度」、「web閲覧に時間を費やすことが『情報の獲得』など自分の生活にとって有意義なことであると思う程度」、「自分が『ネット閲覧依存者』であると思う程度」について同様に5段階評定を行った。

b. 社会的スキルにかかわる項目

菊池章夫（1988）による社会的スキル尺度（KISS-18）について5段階評定にて調査した。

結果と考察

図1に示された因果モデルに、社会的スキルの下位項目を組み込むために、先ずメール送信に関して、「メール送信回数」や「メールは関係維持に有意義」、「メールが他の活動に支障」の各変数を従属変数とし、社会的スキルの各下位項目を独立変数として重回帰分析を行ったところ、「非難に対する対処」や「矛盾した話に対する処理」、「人と違った考えをもちながらうまくやってゆく」という「ストレス処理」に関わるスキルにおいて関連が有意であると認められ、「他人と話していてあまり会話が途切れない」や「知らない人でもすぐ会話が始められる」、「初対面の人に自己紹介が上手にできる」

などの「初歩的」スキルについては傾向が認められた ($p<.10$) ので (表1参照)、それらを因果モデルに加えてパス解析を行うことにした。

一方、web閲覧についても、「web閲覧時間」や「web閲覧は情報獲得に有意義」、「web閲覧が他の活動に支障」を各々従属変数、社会的スキルの各階項目を独立変数として重回帰分析を行ったところ、仕事上で「何をどうやったらよいか決める」、「どこに問題があるかすぐに見つけることができる」、「目標を立てるのにあまり困難を感じない」などの「計画性」に関わるスキルが有意な関連を示したので (表2参照)、それらを因果モデルに加えてパス解析を行った。

表1 「メール送信が他の活動に支障をきたしている」評価意識を従属変数とする重回帰分析結果

	標準偏回帰係数 (β)	相関係数 (r)
初歩的なスキル	.292	.194
高度なスキル	-.070	-.044
感情処理のスキル	-.080	-.046
攻撃に代わるスキル	.196	.128
ストレスを処理するスキル	-.371*	-.225
計画のスキル	.119	.085
重相関係数 (R)	.306	

* $p<.05$ ** $p<.01$

表2 「web閲覧時間」を従属変数とする重回帰分析結果

	標準偏回帰係数 (β)	相関係数 (r)
初歩的なスキル	.046	.030
高度なスキル	.042	.028
感情処理のスキル	-.013	-.007
攻撃に代わるスキル	-.074	-.049
ストレスを処理するスキル	.207	.127
計画のスキル	-.365*	-.261
重相関係数 (R)	.294	

* $p<.05$ ** $p<.01$

パス解析の結果については、メール送信にかかわるパス・ダイアグラムを
 図2に、web閲覧にかかわるパス・ダイアグラムを図3に示した。参考のため()
 内に重相関係数、また内生変数に向けられた矢印にて外乱を示してある。二
 図の比較のため、パス係数は絶対値が低いものもそのまま残して表記した。

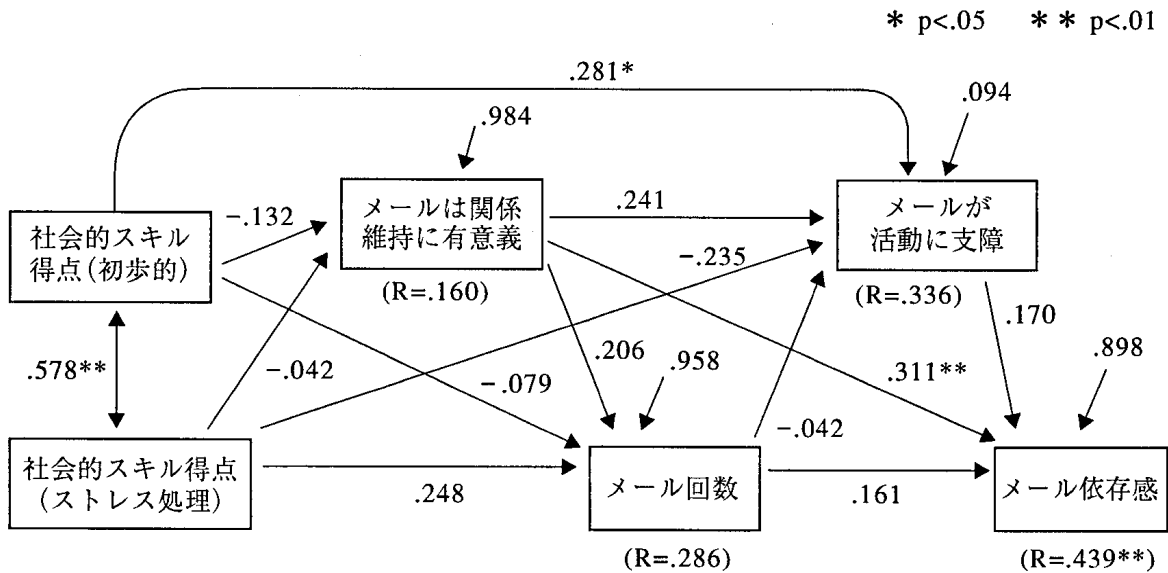


図2 社会的スキル（初歩的およびストレス処理）とメール送信数
 およびそれに関わる評価意識のパス・ダイアグラム

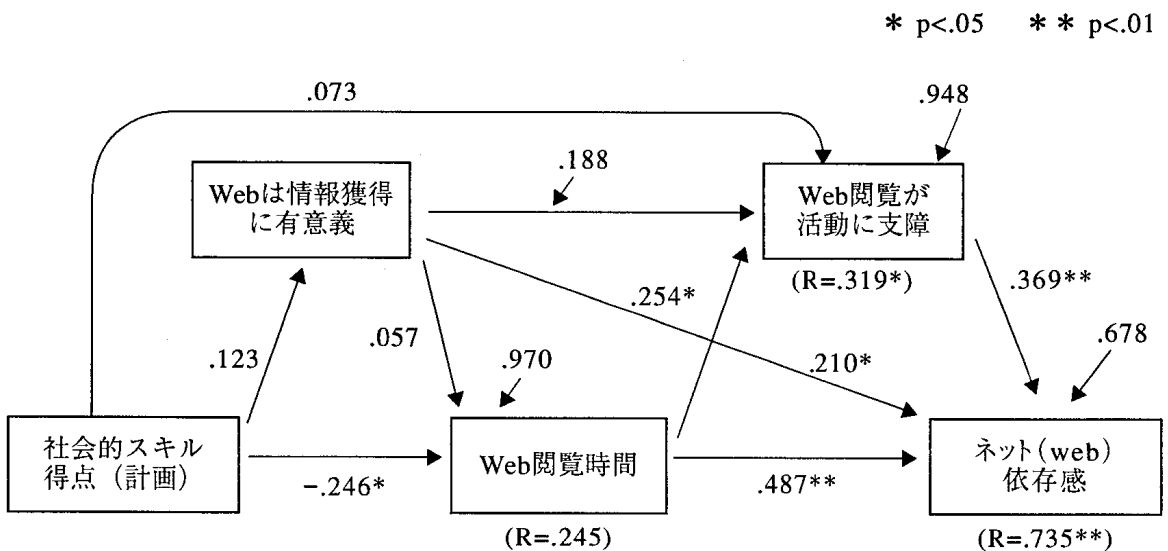


図3 社会的スキル（計画）とweb閲覧時間および
 それに関わる評価意識のパス・ダイアグラム

先ず、メール送信に関しては、「初歩的」な社会的スキルが「メールが他の活動に支障」に有意な直接的効果を示している点を指摘することができる。また、傾向としてはあるが ($p < .10$)、「ストレス処理」の社会的スキルについても、「メールが活動に支障」に直接的効果を負の方向において示している。

また、「初歩的」な社会的スキルは「メール送信回数」に直接的効果をほとんど及ぼしていない一方で、「ストレス処理」の社会的スキルは傾向としてはあるが ($p < .10$) 一定の直接的効果を正の方向において示している。

このように社会的スキルは、「初歩的」な社会的スキルが「他の活動に支障を及ぼしている」というメール送信活動に関する評価意識に正の直接的効果を及ぼす一方で、「ストレス処理」の社会的スキルは逆に負の直接的効果を及ぼしながら、実質的な「メール送信回数」に正の直接的効果を及ぼすというように、そのスキルの下位領域によって効果の主要に及ぶ先と方向が異なることがわかる。

ところで「メール送信回数」の「メールが他の活動に支障」、にたいする直接的効果はほとんど示されていない。また、「メール依存感」にたいしては「メール送信回数」ではなく、「メールは関係維持に有意義」が有意な直接的効果を示している。「メールが他の活動に支障」を与えているという評価意識は、「メール送信回数」という物理的時間を占有する度合いの要因よりも、「関係維持に有意義であるか」という評価意識によって規定されることがこれよりわかる。同時にこの「支障感」は、メール送信という行為について、「初歩的」なスキルによって対人関係に入ることが可能なゆえに感じられる「支障感」や、対人関係調整スキルとしての「ストレス処理」スキルが可能なゆえに回避できる「支障感」として、質的に異なるスキルの直接的効果によって生み出されている可能性が考えられる。

以上のことは「メール依存感」についても考察可能である。すなわち

「メール送信回数」という物理的な頻度ではなく「関係維持に有意義である」という感覚と強く関連していることから、有意義であるという評価意識が、その行為に「のめり込み」「依存する」という結果を導く要因となっているとして、同様に解釈できる。なお、この「関係維持に有意義」という感覚は、社会的スキルの2つの下位項目のいずれの外生変数とも有意な正の直接的効果が示されていないことからそれは示唆されるものである。

web閲覧の場合において見られる結果については、メール送信の場合と比較するために、「web閲覧時間」が、社会的スキルおよび「ネット（web）への依存感」とどのように関連しているかについて検討した。

メールの場合と比較して、web閲覧の場合、「ネット（web）への依存感」はメールの場合のような「webは情報獲得に有意義」という変数のみならず、「web閲覧時間」および「web閲覧が活動に支障」という変数とも有意な直接的効果の関係をもっていることがわかる。また、「web閲覧時間」は「web閲覧が他の活動に支障」を及ぼすという評価意識とも有意な直接的効果の関係を示しており、web閲覧という行為においては、メール送信という対人関係への配慮が必要なコミュニケーションの場合とは異なり、より物理的な時間の占有に近い次元で評価意識が生み出されていることが示唆されている。

社会的スキルについても「計画」的な次元での社会的スキルが、「web閲覧時間」に対して負の直接的効果を示しており、コミュニケーション関係維持の技能というよりは、より時間管理的な側面でのスキルが関係していることが示唆される。

メール送信という行為は、携帯情報端末と向かい合うという点で、web検索や携帯ビデオゲーム機器の操作と同様の機器操作的な作業によって時間を占有することになる。しかしながら、そこで行われている活動は、機器に媒介されたコミュニケーションである。その円滑な運用には、機器操作の巧みさではなく、人間関係維持にかかわるスキルが要求されることになる。メー

ルの送受信にのめり込むという感覚が、単なる機器操作による画面展開の変化を楽しむことへの没入行為ではなく、メールのやりとりという特別な人間関係を維持する行為であり、それに意義を見つけることで、メール送信回数の増加へとつながったとしても、それをもって即ちメール依存感やメールが他の活動に支障をきたしているとは感じられない行為として、意識され評価されている可能性が今回の調査によって示唆された。

従来、電子メールとweb閲覧というかたちで区別されてきたインターネット利用における二つの異なる情報活用の形態は、blogやSNSという新たなサービスの登場によって、両者の垣根を越えた新しいコミュニケーションの形を日常化しつつある。そこで展開されるコミュニケーションの機能とそこに成立する人間関係の構造について、その媒体の特質にさらに着目した分析が必要となることが考えられる。しかしながら、あくまでもそこで成立する関係はコミュニケーション主体とその媒体との関係ではなく、コミュニケーション主体間との関係、すなわち、社会的スキルのある側面が円滑に機能すればするほどその世界にのめり込んでしまう、人と人との関係の問題であるという点に着目して分析を進めることが必要であろう。

参考文献

- | | | | |
|-------|------|--------------------------------|---------------------------------------|
| 電通総研編 | 2007 | 情報メディア白書 | ダイヤモンド社 |
| 菊池章雄 | 1988 | 思いやりを科学する | 川島書店 |
| 正高信男 | 2003 | ケータイを持ったサル | 中央公論社 |
| 竹内伸宜 | 1999 | 学生の携帯通信機器の利用に関する調査 | 神戸海星女子学院大学・短期大学
研究紀要 第38号 173-186頁 |
| 竹内伸宜 | 2004 | 学生による携帯メディアの利用形態と社会的スキルの関係について | 神戸海星女子学院大学研究紀要 第42号 179-191頁 |